巻　頭　言

田の草取り50時間

公益財団法人日本植物調節剤研究協会　専務理事
横山　昌雄

私は「田の草取り」を小学生の頃，社会科の授業で年中行事として「田植え」とセットで習ったことを記憶している。1964年の東京オリンピック以前のことだから，教科書に載っていたグラフや表は1960年ごろのものであったように思う。まだ，農村の人口も多く，教科書にはそれを反映した内容が多く載っていた。教師が円グラフを指して「欧米の先進国は一次産業より二次産業，三次産業で働く人が多い，日本も発展するにはそうならないといけない」，「電力も水力より火力発電だ」と説教されたこと覚えている。東京オリンピックを控え，表通りはもちろんのこと路地裏まで舗装され，交通量が増え，道路で遊ぶことができない。急速に都市化が進行していた時期で，そのことと対比して農村のこと，田植えや草取りのことを記憶に止めていたのかもしれない。

1960年ごろまでは太平洋戦争からの復員兵が農村に帰り，農村では過剰人口や失業が重要な問題になっていた。「貧乏人は麦を食え」の池田首相による国民所得倍増計画の中には農村の労働力を二次産業，三次産業に動員するため，農地の移転や整備，農業の機械化，地域経済振興などの政策が図られていた。

1960年以降になると農業の機械化と農業資材等の急速な普及により，農村の労働力需要が減少し，農村の労働力はこの後に発展した二次，三次産業へ容易に移動した。この移動には除草剤の普及も大いに貢献した。1949年の農林省の統計による除草労働時間50.6時間は除草剤がない時代の除草労働を示し，除草剤の普及で急速に減少した。現在は1.3時間である。

「除草労働50時間から1.3時間」は除草剤の貢献を総括的に表しており，時間軽減による経済効果として説明してきた。ところが，最近，除草労働50時間の中身の一端を岩手県の江刺，現在の奥州市で知ることになった。日本人が一般に何でも総括論的に表現することが好きなように，私もおよそ複雑なこと程簡単に片付けてしまうことを反省しつつ，農家の老婦人の話を拝聴した。

彼女が住んでいる農村は30戸程度の集落で田植え，田の草取りをお互い手伝い，共同して行っていたそうだ。田んぼの耕起や代かきは牛馬を使い，苗代での育苗，収穫は個々の農家が行ったそうで，昭和30年ごろから動力耕耘機が普及し始めるまでは，畜力や手作業が主流だったようだ。田植えと田の草取りは集落の農家を半分に分け，14，5軒が一単位になり，共同で行った。

田植えは6月上旬にそれぞれの農家が総出で行った。1日にできるのは農家一軒分で，集落全体の田植えが済むのに2週間ほどかかった。10軒目くらいになると田んぼに雑草が生えてくるので，草を土中に埋めながら田植えを行った。全ての農家の田植えが終わるころには初めに田植えを行った田んぼに雑草が生えている。田植え終了後，すぐに田の草取りが始まる。草取りには手押し除草機も使ったが，イネ株の周りの雑草は除草機では取れないので，這いつくばって，土を掻き混ぜ，雑草を土中に埋める。田の草取りは早朝からはじめ，暗くなるまで行うが，農家一軒分を1日かける。すべての農家の草取りが終わるのに14，5日かかる。初めに草を取った田んぼにはすでに雑草が生えており，次の田の草取りが始まる。これを連続して3・4回繰り返す。田の草取りは8月上旬まで続く。田植えから休みなしで，田の草取りが続いた。女性たちは自分の田んぼの草取りが行われているときには朝や昼の食事も提供したそうで，寝る暇もなかったそうだ。稲作以外にも作業があるので，常に農家総出というわけではないようだが，女性，特に嫁さんだけは休みなしで田の草取り，もちろん家事や子育ても行う。農家の娘たちは農家には嫁ぎたくないと思ったそうだ。共同作業の田の草取りは終わっても，取り残された雑草，とくにヒエ取りが収穫直前まで続いたそうだ。

老婦人は最後に除草剤が過酷な田の草取りから女性を解放してくれたと。しかし，農村に嫁ぐ女性がいまだに少ないことは残念である。